

フランス語および日本語における留保マーカーについて

渡 邊 淳 也

1. はじめに¹

本稿は、フランス語と日本語における留保マーカー (enclosures) について論ずることを目的とする。留保マーカーは、近似表現 (approximatif) を対象とするものであるので、まず近似表現の定義から見てゆこう。

(1) 近似表現の定義

近似表現とは、精確さの度合いが低い言語表現の使用のことをいう。(Par « approximatif », nous entendons l'emploi d'une expression langagière avec un faible degré d'exactitude.)

たとえば、(2) のような概数や、(4) のような、適用の可能性に幅のある概念が関係してくる。

(2) Je gagne 3 500 francs par mois. (Reboul 1991, p.90, 一部改変²)

(わたしは月収 3500 フランです。³)

(3) Je gagne 3 545 francs et 50 centimes par mois. (idem)

(わたしは月収 3545 フラン 50 サンティームです。)

(4) J'habite à Paris. (Reboul et Moeschler 1998, p.168)

(わたしはパリに住んでいます。)

(5) J'habite à Neuilly. (idem) (わたしはヌイイーに住んでいます。)

(2) のような発話文は、月収が精確に 3500 フランなのではなく、概数として 3500 フランである場合にも可能である。その際、精確な数字を提示する (3) のような発話文との対比において、(2) は近似表現であるといえる。また、(4) の発話文も、パリの 20 区内に住んでいなくても、パリ近辺に住んでいるという趣旨でも可能である。その場合も、(5) のような精確な行政区画に言及す

る発話文にくらべて、(4) は近似表現であるといえる。

(2), (4) にみた発話文では、それが近似表現であること自体は言語的に明示されていない。しかし、つぎの (6), (7) を見よう。

(6) Je gagne **environ** 3 500 francs par mois. (わたしは月収およそ 3500 フランです。)

(7) J'habite **aux environs de** Paris. (わたしはパリ近辺に住んでいます。)

これらの例にみられる *environ* や *aux environs de* は、それによってみちびかれる辞項が近似的であることを明示しているといえる。このような、近似性を明示するマーカーのことを、「留保マーカー」(*enclosures*) とよぶことにしよう。定義のかたちで示すと、つぎのようになる。

(8) 留保マーカーの定義

「留保マーカー」とは、それが導入する辞項が近似的であることを明示するマーカーである。(Par « *enclosures* », nous entendons les marqueurs qui explicitent le statut approximatif du terme qu'ils introduisent.)

留保マーカーの例としては、ほかにも, *presque*, *à peu près*, *à peine*, *pratiquement* (Jaye 1987) や, *pour ainsi dire*, *une espèce de* (Tamba 1991, p.26) などをあげることができる。

ここでは、(6), (7) のように、留保マーカーをともなっている場合も、「近似表現」にふくめることにしよう。こうした近似表現は、一般には、概数や、概念のある程度の妥当性を示す表現、すなわち、なんらかの単一の辞項を作用域とする表現と解せられるが、よりひろい射程として、発話文総体の近似性をも対象とすることができると考えられる。

以下、2 節および 3 節では、フランス語における留保マーカーの事例研究として、それぞれ、副詞句 *en quelque sorte*, 動詞 *sembler* について考察し、4 節では、日本語の留保マーカーのひとつである助動詞「ようだ」、「みたいだ」について考察する。

2. En quelque sorte

フランス語の留保マーカー *en quelque sorte* は、場合によってさまざまなことになったレベルの作用域に対してはたらきうる。まず、たとえば (9) においては、*en quelque sorte* の統辞的な作用域は、名詞句 *le pur bourgeois* である。

- (9) On comprend que le mendiant soit **en quelque sorte** le pur bourgeois ; car il n'obtient que par un art de demander, par des signes émouvants ; les haillons parlent. Et le chômeur, par les mêmes causes, est aussitôt déporté en bourgeoisie.

(Alain, *les Arts et les Dieux*, p.1235)

(物乞いはある意味で純然たるブルジョワであることがわかる。というのも、彼らはお願いをする技術と、ひとの心を動かす徴表だけで、金品を得ているからだ。ぼろ着がものをいうのだ。そして、失業者も、おなじ理由から、ただちにブルジョワジーに属することになる。)

つぎの (10) においても、*en quelque sorte* の作用域は、直後にくる名詞句 *une aide à la créativité* であり、一見したところ、やはり名詞句を対象にしているように思われる。

- (10) Quel est le but de nos travaux ? Proposer aux écrivains de nouvelles « structures », de nature mathématique ou bien encore inventer de nouveaux procédés artificiels ou mécaniques, contribuant à l'activité littéraire : Des soutiens de l'inspiration, pour ainsi dire, ou bien encore, **en quelque sorte**, une aide à la créativité.

(Queneau, *Bâtons, chiffres et lettres*, p.321)

(われわれの仕事の目的はなにか。作家たちに数学的な性質のあたらしい「構造」を提案することであり、あるいはまた、文学的な活動に資する、あたらしい人工的、機構的な手づきを発案することだ。いわば着想の手助けであり、あるいはまた、ある種、創造性への援助である。)

しかし、より細かにみてゆくと、(10) は (9) とはちがった様相を呈して

いる。名詞句 *une aide à la créativité* は、もうひとつの名詞句 *des soutiens de l'inspiration* と等位接続されており、さらにその名詞句もまた、*pour ainsi dire* という別の留保マーカーをともなっている。ここでは、著者が適切なことばを探して逡巡しているところを見てとることができる。註釈的に言いかえるならば、「どちらももっとも精確な表現ではないかもしれないが、*des soutiens de l'inspiration* とでも言おうか、あるいは、ある意味で *une aide à la créativité* とでも言えようか」というぐあいである。統辞的には名詞句という単一の辞項を対象としているようでいて、*en quelque sorte* は、この言いかえにもあらわれているように、用語の選択という次元を介して、「言う」こと、すなわち発話行為の次元にもつながっているのである。(10)においては、表記のうえでも、*en quelque sorte* が前後をヴィルギュルで区切られた挿入句的な位置に生じており、文副詞的な徴候を呈していると考えられることもできる⁴。

つぎに (11) の例を見よう。

- (11) L'épisode hypnotique, dit-on, est ordinairement précédé d'un état crépusculaire : le sujet est **en quelque sorte** vide, disponible, offert sans le savoir au rapt qui va le surprendre.

(R. Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p.225)

(催眠的な出来事には、衰微的な情態が先立っているという。そのとき、主体はある意味で空疎で、待機状態にあり、思わず知らず、彼をとらえる人さらに身をゆだねるのである。)

ここでは、*en quelque sorte* は、3つの属詞形容詞 *vide*, *disponible*, *offert* に対して機能している。しかしここでもまた、3つの言い方を積み重ねることにより、言いかえや表現の選択という次元があらわれているとみることでもでき、発話行為のレベルへのかかわりを否定することはできない。

以上でみてきたような例においては、*en quelque sorte* は、発話行為のレベルへの関連性をもちながらも、統辞的には、名詞句 [(9), (10)] や属詞形容詞 [(11)] など、単一の辞項としてとらえられる単位を作用域としているといえる。それに対して、下の (12) 以降で見てゆく例文は、おなじ *en quelque sorte* が、統辞的にも命題全体を作用域としているとみとめられる例である。

- (12) Il y a trois semaines, j'avais résolu de me saisir d'un discours qu'il

venait de prononcer à Gannat (je crois) et de le dépiauter, de le découper phrase par phrase : je rêvais d'anatomiser le mensonge, **en quelque sorte**. (Mauriac, *Bloc-notes 1952-1957*, p.289)

(3 週間まえ、ガナに対して (だったと思うが) 彼が言ったことばをとらえ、あらさがしをして、一文一文を分解しようと心にきめた。ある意味で、嘘を解剖しようと夢想したのだ。)

- (13) Bref, nous ne parvenons à vivre, disent nos hédonistes, que tant que l'insupportable et profonde horreur du vivre se dissimule sous le voile sucré du plaisir. **En quelque sorte**, le plaisir est notre seul recours pour supporter la vie. (Annie Leclerc, *Parole de femme*, p.175)
(快樂主義者がいうには、要するに、生きるというたえがたく深い恐怖が、快樂の甘いヴェールで見えなくなるからこそ、われわれは生きられるのだ。ある意味で、快樂は、人生をたえしのぶための、われわれの唯一の手段なのだ。)

(12)においては、*en quelque sorte* は、「嘘を解剖する」といった隠喩表現が、まさに隠喩表現としてのみ妥当性をもつということを示そうとしているように思われる。また、(13)については、発話文の内容そのものは隠喩的ではないが、快樂主義者の主張を紹介するくだりであり、その立場をみとめたうえでなら、という留保をつける意味あいでは *en quelque sorte* が用いられていると考えられる。いずれの場合においても、*en quelque sorte* は、発話文の内容の有効性の領域 (*champs de validité*) を制限する役割を果たしているといえる。すなわち、その機能は、つぎの (14) にみるような、棒づけの副詞 (*adverbe de cadrage*) に類するものである。

- (14) **Financièrement**, cette opération fut un fiasco. (Guimier 1996, p.143)
(財政的には、この作戦は大失敗だった。)

(14)において、副詞 *financièrement* は、あとにつづく発話文の内容が有効となる領域が、財政的な領域にかぎられることを示している。これに対して、*en quelque sorte* の場合は、*quelque* という不定形容詞が用いられていることから明らかなように、内容の有効性をいかなる領域へと画定しているかは示されていない。いかなる領域への画定であるかを示さないまま、ただ、

なんらかの画定がおこなわれていることだけを標示しているのである。その点において、*en quelque sorte* は、枠づけの副詞としてはまったく特定化不全 (*sous-spécifié*) であることはまちがいない。しかし、多くの場合は、デフォルトにより発話者の観点がその領域をさだめていると考えることができる (ただし、(13) のように、他者の観点に言及している場合はそのかぎりではない。(13) では、*disent nos hédonistes* という挿入節によって源泉が明示されており、このように、発話者以外の源泉が明示されているときは、他者の観点に依拠していることになる)。

つぎに、パリ市交通公団の広告から引用した、(15) の例を考えてみよう。

- (15) *En surprenant nos voyageurs, nous agissons pour que le temps de transport soit un moment vécu positivement par tous ! En quelque sorte, nous réinventons le transport et le rapport entretenu avec nos clients. Les stations de métro deviennent de véritables lieux de vie, qui proposent aux voyageurs des événements culturels liés à l'actualité de la ville et de la société, à l'histoire, à l'art ou à la science.* (Publicité de RATP)

(お客さまをおどろかせる企画を打ち出し、わたしたちは移動時間をみなさまにとって好ましい時間になるよう行動しています。ある意味で、わたしたちは、交通機関を再発案し、お客さまとの関係を再発案しようとしています。地下鉄の駅は本当に生活の場になり、都市、社会、歴史、芸術、科学の活動とむすびついて、文化的なイベントをお客様に提供いたします。)

この例は、広告の性質を反映した興味ぶかい例である。一般的に、広告は、説得的になるよう、それでいて押しつけがましくなく、疑わしい印象もあたえないように配慮されている⁵。この広告の筆者は、「*nous réinventons le transport et le rapport entretenu avec nos clients*」という内容が、そのまま断定されたのではいささか誇大になりかねないことを意識して、調整のために *en quelque sorte* を用いたと考えられる。

以上でみてきた3つの例に共通していることは、*en quelque sorte* が、なんらかの事態や観念をあらわすために用いられている命題形式の精確さについて、一定の留保をつけているということである。それはまさに、Sperber et

Wilson (1989) による関連性理論において、「解釈的用法」とよばれるものに対応していると思われる。彼らによると、命題形式による表象には、「記述的用法」と「解釈的用法」というふたつの用法がある。「記述的用法」と「解釈的用法」の定義を以下に引用しておこう。

- (16) « Elle [=toute représentation ayant une forme propositionnelle] peut représenter un état de chose en vertu du fait que sa forme propositionnelle est vraie de cet état de chose ; dans ce cas nous dirons que la représentation est une description ou qu'elle est utilisée descriptivement. Ou bien la représentation peut représenter une autre représentation, dotée elle aussi d'une forme propositionnelle – une pensée, par exemple – en vertu d'une ressemblance entre les deux formes propositionnelles. Dans ce cas, nous dirons que la première représentation est une interprétation de la seconde, ou qu'elle est utilisée interprétativement. » (Sperber et Wilson 1989, p.343)
- (命題形式をもつどんな表象も、その命題形式がその状況に対して真であるということから、ある状況をあらわすことができる。このときその表象を記述であると、あるいは記述的に用いられているという。あるいは、ふたつの命題形式が類似していることから、同様に命題形式をもつ別の表象—たとえば、ある思考—をあらわしうる場合もある。このとき、前者の表象が後者の表象の解釈であるとか、解釈的に用いられているという。)

すなわち、解釈的用法においては、一方の命題が他方の命題を表象するような関係にある、ふたつの命題のあいだでの比較が問題になっているのである。留保マーカー *en quelque sorte* の場合は、表現された命題が、現実、または発話者の思考に対応する理想的・潜在的な命題の表象にしているといえる。そのことから、前者の命題の精確さが、相対化されることになるのである。

3. Il me semble que...

フランス語の動詞 *sembler* については、すでに渡邊 (2003) (2004) などで論じている⁶ が、とりわけ非人称用法で、かつ経験者をあらわす間接目的補

語 *me* をともなう *il me semble que...* の形におかれたときに、発話文全体に対する留保マーカーとして機能することが多いようである。たとえば、つぎのような例がそれにあたる。

- (17) « Je reviendrai bientôt prendre mes valises, sanglota-t-elle. Adieu, Cécile, nous nous entendons bien. »

Je n'avais jamais parlé avec elle que du temps ou de la mode, mais **il me semblait** pourtant **que** je perdais une vieille amie.

(F. Sagan, *Bonjour tristesse*, p.43)

「そのうちスーツケースをとりにもどるわ」といって、彼女はすすり泣いた。「じゃあね、セシル。あたしたちは気が合ったわね」

わたしは彼女とは天気とファッションの話しかしなかったけれど、古くからの友だちを失うような心もちがした。）

渡邊（2003）（2004）では、動詞 *sembler* は本質的に「類似性」（similitude）をあらわし、それが文脈によってどのような意味の実体に適用されるかに応じて、推論的解釈、隠喩的解釈などのさまざまな解釈を生む祖型になっている、という主張を展開した。たとえば、推論的解釈では、命題と、推論の出発点となる徴候的事実とを操作対象（opérande）とする類似性が確認され、隠喩的解釈では、命題と、それに対応する実質（の表象）とを操作対象とする類似性が確認された。

一方、間接目的補語の *me* は、「*il me semble que...*」という文全体を発するかぎりでの「発話者」（énonciateur）とはことなる地位にある、「知覚主体」（sujet percepteur）を指示する機能をもつとした。間接目的補語が *me* である場合は、それがさししめす知覚主体は、現実世界では発話者と同一指示（coréférence）の関係にあるとしても、言語による分節の次元ではことなるレベルに属していると考えられる。そのレベルとは、発話レベルに概念的にさきだつ、内容の感知ないし情報獲得のレベルのことであり、それを「知覚レベル」とよぶことにする。まとめると、つぎの（18）のようになる。

（18）知覚レベルと発話レベル

- (a) 知覚レベル（niveau de perception）には、知覚時点（moment de perception）、知覚主体（sujet percepteur）が属する。

- (b) 発話レベル (niveau d'énonciation) には、発話時点 (moment d'énonciation)、発話者 (énonciateur) が属する。

たとえば、(17) では、sembler が半過去におかれているが、その半過去によって示されている過去の知覚時点において、que... 以下でのべられている内容を感知したかぎりでの主体を me が示しているのである⁷。

(17) の例文の観察として、同時に指摘しておきたいことは、que 以下が心理状態をあらわしているということである。このことは、間接目的補語 me をふくまない il semble que... が、たとえばつぎの (19) の例のように、que 以下単独では事實的 (factuel) と解される内容をみちびくことと対照的である。

- (19) **Il semble que** les Français n'aient pas le vert : les trois quarts de la salade partent pour l'alimentation animale ou la poubelle.

(*Antenne 2 - magazine*, février 1991, p.34)

(フランス人は生野菜が好きでないようだ。というのも、サラダ菜の4分の3は、飼料かごみになっているからだ。)

ほかにも、il me semble que... の例を見てゆくと、que 以下には心理状態や感覚と関係したことが来る場合が多い。以下の例も同様である。

- (20) Je n'avais jamais ressenti une faiblesse aussi envahissante, aussi violente. Je fermai les yeux. **Il me semblait** que mon coeur cessait de battre.

(F. Sagan, *Bonjour tristesse*, p.77)

(わたしはかくも気がかりで、かくも強烈な無力さを感じたことは決してなかった。わたしは目を閉じた。心臓が止まるような心もちだった。)

(20) のなかで、que... 以下の内容は、心臓の鼓動がとまるということであり、そのままでは感覚や心理状態の描写とみなすことはむずかしい。そこで、自然な解釈として、心臓の鼓動がとまることにたとえられるほどのくるしい心理状態であるという、隠喩的解釈がなり立つのである。この例にかぎらず、心理状態 (あるいは感覚) は、具象性がなく、そのままでは表現しづらいことから、隠喩の仮象をもちいてあらわされることが多い⁸。

- (21) Béatrice : Et quelle impression éprouvez-vous?

Modigliani : **Il me semble que** maintenant pour moi tout est possible... **que** je pourrais peindre l'univers entier,... mais que si je voulais peindre l'univers entier... c'est un portait d'elle que je ferais... (Scénario de « Montparnasse 19 »)

(ベアトリス：それで、どんな気もちなの？)

モディリアニ：いまならなんでもできるような気がする。全世界を描けるような気が。でも、もし全世界を描こうとするなら、ぼくが描くのは、彼女の肖像になってしまうだろうな。)

(21) においても、モディリアニが自らの心理状態を明かしているということは、直前のベアトリスの問いとのかかわりにおいても明らかである。

- (22) Le soleil était doux et chaud, **il me semblait qu'il** faisait affleurer mes os sous la peau, qu'il prenait un soin spécial à me réchauffer. Je décidai de passer la matinée ainsi, sans bouger.

(F. Sagan, *Bonjour tristesse*, p.102)

(太陽はやさしく暖かで、まるでわたしの骨を皮膚のすぐ下までひきだして、わたしをあたためるために特別の配慮をしてくれているかのように感じた。わたしは午前中をそうやってじっとして過ごすことにした。)

- (23) [サハラ砂漠に飛行機で不時着したあと] Je m'en vais donc, mais **il me semble que** je m'embarque en canoë sur l'océan.

(Saint-Exupéry, cité dans Tamba 1981, p.163)

(それでわたしは出発するのだが、大洋へとカヌーで漕ぎだすような心もちだ。)

(22) は、朝、陽光をあびているときの感覚を、(23) は、砂漠のただなかにいる心細さを、それぞれ隠喩的に語っているものである。このように、il me semble que... は、心理状態や感覚をみちびくことが多いのである。

このことは、me が知覚主体をあらわすという本稿筆者の仮説とも合致する現象である。me によって知覚主体が明示されることにより、il me semble que... の場合は、il semble que... の場合にくらべて、知覚レベルが前面に出る。そのことから、il me semble que... がもっている、心理状態や感覚をのべ

る内容との親和性が説明できるのである。

つぎに、もう少しちがった種類の例を検討してみよう。

- (24) – Monsieur le secrétaire, **il me semble que** M. Gayaud avait dit, il y a un an : « Aucun sport n'est vraiment contre-indiqué... »

(A. Blondin, *Ma vie entre les lignes*, p.277)

(「秘書さん、ゲヨー先生は、1年まえ、『スポーツならなんでも、身体に悪くはない』とおっしゃっていたと思うのですが...」)

この例については、1年まえのことで、発話者の記憶がやや不確かになっているという解釈も完全には排除できないものの、どちらかというところ、発話者としては確信していることではありながらも、あえてその語調を緩和して、ひかえ目ないいかたをしていると見るほうが自然であろう。それは、対話者間の衝突をまねくおそれのある峻厳なスタイルの反駁を回避し、婉曲な言いかたをえらぶという、ポライトネスの観点からのぞましいとされる発話上の方略 (stratégie énonciative) である。

もうひとつ例をみよう。

- (25) Natacha : Je m'appelle Natacha.

Jeanne : Et moi Jeanne, je suis une amie de Corinne.

Natacha : Corinne ? Je ne vois pas.

Jeanne : Nous sommes pourtant chez elle **il me semble**.

(E. Rohmer, *Conte de printemps, L'Avant-scène cinéma*, no. 392, p.14)

(ナターシャ：あたし、ナターシャっていうの。

ジャンヌ：わたしはジャンヌ。コリンヌの友だちよ。

ナターシャ：コリンヌ？わからないわ。

ジャンヌ：でもわたしたちはいま、コリンヌの家にいると思うんだけど。)

(25) の例は、(24) の例よりいっそうはっきりと、確かな事実である (と発話者が認識している) が語調を緩和しているという特徴があらわれている。ジャンヌは、ここはコリンヌの家であるということを完全に知っており、確信しているのであるが、そのうえで、ナターシャに対する修正的な反論が、むき

出しの粗暴さにならないよう、婉曲的に、語調を緩和して言っているのである⁹。

(24) (25) のように、婉曲的な言明をなす場合、なぜ *il me semble* (que...) が用いられるのであろうか。それは、間接目的補語 *me* による知覚主体の卓立が、発話者の個人的観点への限定を操作しているのであり、そこから語調緩和の効果が得られると考えられる。

以上で見てきたように、*il me semble que...* においては、動詞 *sembler* による類似性の標示、間接目的補語 *me* による知覚主体の卓立というふたつの要因があいまって、心理状態の（しばしば隠喩的な）描写、そして婉曲的解釈などが生じてくるといえる。これらの解釈のいずれにおいても、発話者は、文字通りの内容を全面的に主張しているのではなく、留保をつけながら提示しているといえる。このことは、*il me semble que...* が、一見ことなる用法を通じて、留保マーカーとして機能していることを示していると思われる。

また、前節で問題にした作用域に関しては、*il me semble que...* に関しては、発話文全体を射程とする留保マーカーであるといえる。しかし、動詞 *sembler* の人称用法のひとつである、属詞をみちびく用法は、発話文全体というよりは、*sembler* の主語と、*sembler* がみちびく属詞とをつなぐ整合動詞として、命題内的な射程をもっている。つぎの (26) の例がそれにあたる。

- (26) Et si la technique que Faulkner adopte **semble** tout d'abord une négation de la temporalité, c'est que nous confondons la temporalité avec la chronologie. (J.-P. Sartre, *Situations*, I, p.66)
 (そして、フォークナーの採用している技術が、まず時間性の否定のようにみえるのは、われわれが時間性を年代記と混同しているからである。)

ただし、本稿では *sembler* の人称用法を詳細に扱う余裕はないので、詳細については渡邊 (2003) (2004) を参照されたい。

4. ようだ / みたいだ

ここからは日本語に目を転じ、助動詞「ようだ」「みたいだ」について考えてみることにしよう。「みたいだ」は、「ようだ」の話しことば的なヴァриан

トであるが、条件節内に入らないこと（三宅 2006, p.125）、こんにちの話したことでは連体形の「みたいな」を文末で使う特異な用法があること（この点についてはこの節の最後で言及する）を別にすれば、「ようだ」との相違点は見あたらないので、以下ではそれらを同列にあつかうこととする。

「ようだ」「みたいだ」の本質的機能は、前節でみたフランス語の *sembler* ときわめて類似している。じっさい、森山（1995）、三宅（2006）はいずれも、「類似性」を基盤としたアプローチをとっている。本稿も、「ようだ」「みたいだ」の機能が「類似性」にもとづいているという点には賛同したうえで、留保マーカーという観点から議論をすすめたい。

さらに、「ようだ」「みたいだ」にもまた、前節でみた *sembler* と同様、文全体を作用域とする用法と、命題内的な作用域をもつ用法がある。そして、留保マーカーという問題に関連する範囲でいうと、そのどちらの作用域の場合にも、推論的解釈と、比況的解釈がなされうる。

(27) は、命題内を作用域とする用法のうち、推論的解釈になる例である。

- (27) 名刺をちょうだい、と女の子から言われ、名刺などつくったことがない私は、無職だから名刺はない、と答えた。この人、絵かきかペンキ屋さんのようね、と一人の女の子が言い、私はついにペンキ屋にされてしまった。
(立原正秋『秘すれば花』 p.46)

これは、フランス語の *sembler* の (26) と比較可能な例である。ここで「ようだ」は、外見などの間接的徴候からの推論により、主語「この人」を「絵描きかペンキ屋さん」に繋合するはたらきを果たしている。ただしその繋合は、推論から得られたものであるがゆえに、不確実性を帯びている。その意味において、留保マーカーとして機能しているのである。

(28) は、命題内を作用域とする用法のうち、比況的解釈をもつ例である。

- (28) パスカルの髪は、うっすら褐色、うっすらきいろで、干し草の色のようだ。

(田中小実昌『きょうがきのうに』 p.181)

この例においても構文的には (27) と同様に、「ようだ」は、主語「パスカルの髪は」を「干し草の色」とを繋合するはたらきを果たしているが、その繋

合は、髪の色と干し草の色のあいだの比喩的な類似性にもとづいている。比況的解釈において、「ようだ」は、喩えとして表現された内容と、実際の有り体と考えられるものとのあいだに、比喩的類似性によってへだてられる距離をつくり出しており、その意味で、直接的な繋合に対する留保マークとして機能しているといえる。

つぎに、文全体を作用域とする「ようだ」の例を見ておこう。そのなかで、(29)は推論的解釈の例である。

- (29) 「これはまり子の思いつきだが、ぼくと二人できみのお母さんにお茶を習いたいという話も出ているんだ。桂子さんのところには立派なお茶室もあるし、と、このあいだきみの家に行ってから大分乗り気になっているようだよ」 (倉橋由美子『夢の浮橋』 pp.252-253)

(29) では、発話者(耕一)は、まり子(耕一の妻)の平素の言動を間接的徴候としてふまえての推論的判断の結果として、「(まり子はお茶を習うことに)乗り気になっている」という文全体を「ようだ」で提示するにいたっているのである。

(30) は文全体を作用域とする用法のうち、比況的解釈になる例である。

- (30) 熱い重い、いやなものが、溶岩のように、からだの芯でのたうっている。でも、異物がからだの奥でのたうちまわっているようで、ぼくにはどうすることもできない。

(田中小実昌『きょうがきのうに』 pp.272-273)

この例は、憤懣にかられた心理状態を直喩的に描写している例である。えがかれるべき心理状態の表象と、命題内容にあらわれた仮象とのあいだに比喩的な類似性があることから、「ようだ」が、仮象をあらわす文全体を作用域として用いられているのである。

一方、「ようだ」には、つぎの(31)のように、確かな事実である(と発話者が認識している)が、あえて語調を緩和して、婉曲的に事態を提示しようとする用法も存在する。

- (31) 「みんな揃っているのかい？」主任は、ここにいる連中に声をかけた。

その一人が部屋の中をぐると見まわすようにして、「だいたい、揃っているようです」といった。(三宅 2006, p.128)

これは、直接経験できている事態を、擬制的に推論による判断であるかのよう提示することにより、あえて不確実性を導入している例であるといえる。三宅 (ad loc.) は、「このような表現が価値を持つのは、ある種の情報が新規に話し手に導入されたことを報告する場合に限られる」としている。

ただし、推論用法と婉曲用法の境界は、かならずしもはっきりしているわけではない。つぎの (31) は、両義的な例であると思われる。

- (32) [雑誌編集長の述懐] 考えてみると、私は長老達とはよく喧嘩をしたようです。喧嘩をすることでこの雑誌の均衡が保たれていたようです。
(立原正秋『秘すれば花』 pp.220-221)

この例は、みずから直接経験したことを断定をさけて語っているという意味では婉曲用法にふくめてもよいと思われるが、みずから経験したこととはいえず、「よく喧嘩をしていた」とみなせるかどうか、そして、喧嘩が雑誌の均衡をもたらした要因といえるかどうかについては、判断の差異が入りこむ余地があり、推論用法の不確実性と同様の扱いも可能である。上で引用した三宅 (2006) の、「情報が新規に話し手に導入されたことを報告する場合」には、どちらかという、該当しないように思われる。しかし、推論用法であろうとも婉曲用法であろうとも、留保マーカーという点では共通しており、「ようだ」が留保マーカーとしてひろく用いられることはまちがいない。

最後に、この節のはじめで基本的には「ようだ」の話しことば的なヴァリエーションととらえていた「みたいだ」に独特の、くだけた話しことばにおける用法をみておきたい。それは、「みたいな」という連体形を文末で用いる、(33) (34) のような用法である。

- (33) [映画監督岩井俊二とのインタビュー] やってる当人はそんなに深く考えてないんで。ここまで深読みされても困るんだけどな、みたいな。
(メイナード 2004, p.188)

- (34) [俳優高嶋政宏とのインタビュー] いままで女の子にいい目にあったことがないから、「ちゃんとなんかつきあってやるものか」みたいに思っ

てて。だから、ややこしいこと言いだしたらもう電話しない、みたいな。
(ibidem, p.189)

話しことばに特異な、「みたいな」のこうした用法について、メイナード (2004) は、「類似引用」という概念をもちいて説明をこころみている。いわく、「類似引用とは、導入する会話表現（直接引用部分）が発話されるような状況を呼び起こしながら、その会話表現をそのままではないが類似しているものとして模倣提示する技法である」(ibidem, p.184)。その効果としては、「ソフト化」という概念を提唱している。「例えば「って感じ」と「みたいな感じ」を比較した場合、「みたいな感じ」の方が、より効果的にソフト化を実現する」(ibidem, p.185) といっている。

たしかに、(33) (34) のような例において、文末で用いられている「みたいな」は、擬似的な引用にほかならず、擬似的に発話者を分裂させ、複数の声をひびかせるポリフォニー (polyphonie) 的効果を生むことはまちがいない。しかしながら、そこで「引用」されている仮想的な発言者は、ほんとうに「みたいな」を発する発話者から切りはなされた架空の発言者であるかといえ、それはたいへん微妙である。ここで、本稿筆者がフランス語 *sembler* に関して提唱し、「ような」「みたいな」に関しても森山 (1995)、三宅 (2006) からうけついで「類似性」の概念を再検討してみよう。渡邊 (2003, p.93) および渡邊 (2004, p.125) でのべたように、類似性とは、同一性 (*identité*) と他者性 (*altérité*) をあわせもつ概念である。すなわち、ふたつのものの比較において、「ある観点からすれば同じであるが、同時に、別の観点からすれば異なっている」というように理解することのできる関係である¹⁰。ここでは、この「類似性」が、文末の「みたいな」にもあらわれていると考えたい。すなわち、文末の「みたいな」によって引用されているのは、架空の他者であると同時に、なにほどかは発話者自身でもある。とくに (33) では、ほとんど発話者自身の私的な肉声をすべり込ませているといえるのではなかろうか。

この種の「みたいな」をフランス語に訳するなら、*en quelque sorte, en quelque part, du style, si vous voulez* などのようになるであろう。いずれも、(16) でみた解釈的用法をあらわす表現であり、留保マーカーが解釈的用法と関連が深いことがわかる。

5. おわりに

以上、フランス語の *en quelque sorte* と *il me semble que...*、日本語の「ようだ」「みたいだ」を事例研究として、留保マーカーについて考察してきた。

すではっきりしているように、これらのマーカーは、言語のちがいを超えて、共通しているところが多い。とくに、ひとつの辞項を対象とするか、発話文全体を対象とするかという、作用域の変性は、いずれのマーカーも多かれ少なかれもっているものであり、いたるところで発話行為のレベルを問題にしていることを示しているものと思われる。また、もうひとつ注目すべき点は、いずれのマーカーにも、隠喩（あるいは比況）用法が存在するということである。このことは、隠喩と近似表現の類縁性を示唆していると考えられる¹¹。今後、ほかの留保マーカーの研究や、隠喩、推論など、隣接の概念（をあらわす表現）を研究してゆくことにより、さらなる発展が期待できる。

註

- 1 本稿は、2007～2010年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号19520414「日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究」（研究代表者和田尚明）、および2008～2010年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」（研究代表者渡邊淳也）の補助をうけている研究の成果の一部である。また、本稿の内容の一部は、2009年10月28日、フランシュ＝コンテ大学大学院（フランス共和国ブザンソン市）において開催された第1回筑波大学・フランシュ＝コンテ大学合同セミナーで本稿筆者がおこなった研究発表にもとづいている。
- 2 この例は、もともとは Sperber et Wilson (1986) に由来する。Sperber et Wilson は、近似表現による話しかたを、*loose talk* とよんでいる。
- 3 フランス語と日本語との対照研究の布石として、以下、フランス語の例文には本稿筆者が日本語訳をつけている。
- 4 このように、単一の項を対象としているはずの修飾語が、実は文全体におよぶ射程ももちあわせていると解釈されうる現象は、一見したところ矛盾しているように思われるかもしれないが、実際の言語使用においては決して稀ではない。とりわけ、用語の選択ないし適切性が問題になる場合は、用語という単一の辞項を対象とするせまい射程と、その用語をもちいて発話するという広い射程とが共存しているとみなすことができる。その意味で、Nölke (1993, p.27) が、*même, aussi, surtout* などの「とりたて副詞類」(*adverbiaux paradigmatisants*) と「文副詞類」(*adverbiaux de phrase*) とを包括して、「文脈副詞類」(*adverbiaux contextuels*) というカテゴリーをたてていることは示唆的である。しかし、この問題は本稿での直接の研究対象ではないので、別の機会に論じたい。
- 5 たとえば、Adam et Bonhomme (2007, p.99) は、広告に要求される特性のひ

とつとして, « Soyez modéré, pratique et assurant » といっている (ちなみに, それ自体, 広告からの引用である)。

- 6 人称用法もふくめた, 動詞 *sembler* の全体的な考察については, ここでは展開できないので, 渡邊 (2003) (2004) を参照されたい。
- 7 このように, 発話者としての「わたし」と知覚主体としての「わたし」が分裂してとらえられることは, Ducrot (1983) のポリフォニー理論 (théorie de polyphonie) における「話者としての話者」(locuteur en tant que tel, 当該の発話を発するかぎりでの話者) と, 「世界存在としての話者」(locuteur en tant qu'être du monde, 経験的世界を生きる話者) との対立によってとらえなおすこともできる (ibidem, pp.199-203)。さらに, 廣瀬 (1997, p.11) による「公的自己」(発話状況において聞き手と対峙する話し手) と「私的自己」(聞き手のいない話し手) の区別もまた, 部分的ながら, 類似の扱いが可能な概念であると考えているが, より詳細な相違点については今回は論じる余裕がないので, 別稿に譲りたい。
- 8 ここで, (20) のような例を「隠喩」(métaphore) ということには, 反論があるかもしれない。たんに « Mon cœur a cessé de battre » といってしまう場合とちがって, (20) の場合は, *il me semblait* という媒介的マーカーがはいっているので, むしろ「直喩」(comparaison) ではないかという反論である。もちろんそのような解釈も可能で, (20) が隠喩と直喩の境界的な例であることはみとめられるが, ここでは, *il me semblait* の部分は, かならずしも *comme...* のような直喩標識 (indice de comparaison) と同列にあつかうことはできないと考える。(20) における *il me semblait* は, たとえばつぎの (i) における *il m'avait semblé* と同じく, 感覚や心理状態をあらわしていると見ることができる。
- (i) Henri : Je crois au diable.

Marguerite : Ne prononcez pas son nom ! **Il m'avait semblé** que quelqu'un était là, qui nous épiait... (Scénario de « La beauté du diable »)

(アンリ : 悪魔を信じているよ。

マルグリート : その名まえをいわないで。だれかがわたしたちのようすをうかがっている気がしたから ...)

(i) が (20) とちがうところは, *que...* 以下で提示されている命題が現実的で, なんら隠喩的でないということである。したがって, *il me semble que...* が直喩標識であるというのはあたらない。むしろ, *il me semble que...* は感覚や心理状態をみちびく機能を果たしているだけであり, (20) のような例においては, *que...* 以下の内容自体が隠喩的であると考えたほうが, 整合性があると思われる。

- 9 ただし, この例に関しては, 2009 年 10 月 28 日, フランシュ=コンテ大学における研究会の席上, Daniel Lebaud 氏より, *il me semble* が挿入節化され, かつ文末におかれていることから, 話しことばにおいては一種の間投詞としてはたらいていけると見なすことができるのではないかと, また, *il me semble que...* という主節・補足節型の構文とは別扱いするべきではないかと, というご意見をいただいた。たしかに, 指摘されたような相違点はあるものの, ここでは, 主節・補足節型の例である (24) と, 文末挿入節型の例である (25) とが, 相手の発言に対する修正的反駁という点においては酷似していることから, 留保マ

カーとしての機能には共通点があると考えたい。また、同じ (25) の例に関しては、2010 年 6 月 24 日、筑波大学とフランシュ＝コンテ大学を結んで実施された遠隔会議の席上、フランシュ＝コンテ大学側の来場者から、話しことばにおける音調によっては、「婉曲的」どころか、むしろ攻撃的にもなりうるという指摘もいただいた。しかしながら、攻撃的な解釈については、「慇懃無礼」ともいふべき、額面上の丁寧さとは裏腹の解釈であり、il me semble が婉曲的解釈を生む段階よりさらに派生的な段階の解釈の問題として扱えるのではないかと考えている。

- 10 こうした関係については、多くの先行研究で言及がある。Vigh (1975), Tamba-Mecz (1981), 山梨 (1988), ドルヌ (1995), Delamotte-Legrand (1999), Deguy (1999) など。たとえば、ドルヌ (1995) は、その論文の全篇を通じて、フランス語の副詞 aussi を、《同》と《他》との組みあわせによって説明している。また、山梨 (1988, p.30) は、「類似と差異の認知」と題して、「この比較のプロセスには、基本的に二つの認知のプロセスがかかわっている。その一つは、ある対象ともう一つの対象の間の類似点を見つけだすプロセスであり、もう一つは、これらの対象の間に差異を見つけだすプロセスである」とのべている。
- 11 本稿筆者は、日本フランス語学会 2010 年度シンポジウム「フランス語学と意味の他者」(2010 年 5 月 29 日、於早稲田大学)において、隠喩を有標の文彩とみなすのではなく、通常の言語使用の一環としてあつかうことを提唱した。詳細については、『フランス語学研究』45 号 (2011 年発刊) 掲載予定の談話会報告などをごらんいただきたい。

参考文献

- Adam, J.-M. et M. Bonhomme (2007) : *L'argumentation publicitaire*, Colin.
- Bourdin, Ph. (1988) : « « Sembler » et « paraître », ou les deux visages de l' apparence », *Semantikos*, 10, 1-2, pp.45-67.
- Deguy, M.(1999): « Et tout ce qui ressemble... », N. Charbonnel et G. Kleiber (éds.) : *La métaphore : entre philosophie et rhétorique*, Presses universitaire de France, pp.17-31.
- Delamotte-Legrand, R. (1998) : « Les *pairs* sont-ils des *mêmes* ou des *autres* ? », J. Bres et alii (éds.) : *L'autre en discours*, Praxiling (Université Paul Valéry - Montpellier III), pp.261-285.
- ドルヌ, フランス (1995) : 「AUSSI — フランス語の「同 / 他」の論理」, つくば言語文化フォーラム (éd.) : 『「も」の言語学』, ひつじ書房.
- Guimier, Cl. (1996) : *Les adverbess du français*, Ophrys.
- 廣瀬幸生 (1997) : 「人を表すことばと照応」中右実 (編) 『指示と照応と否定』研究社出版, pp.1-89.
- Jayez, J. (1987) : « Sémantique et approximation », *Linguisticæ investigationes*, 11, 1, pp.157-196.
- 加藤陽子 (2005) : 「話しことばにおける発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124, pp.43-52.

- メイナード泉子 (2004) : 『談話言語学』 くろしお出版.
- 三宅知宏 (2006) : 「『実証的判断』が表される諸形式—ヨウダ・ラシイをめぐる—」
益岡隆志ほか (編) 『日本語文法の新地平』 2, くろしお出版, pp.119-136.
- 宮崎和人ほか (2002) : 『モダリティ』 くろしお出版.
- 森山卓郎 (1995) : 「推量・比喻比況・例示—「よう」「みたい」の多義性をめぐって—」
『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』 明治書院, pp.493-526.
- 森山卓郎ほか (2000) : 『モダリティ』 岩波書店.
- Nølke, H. (1993) : *Le regard du locuteur - Pour une linguistique des traces énonciatives*, Kimé.
- Nølke, H. (2001) : *Le regard du locuteur 2 - Pour une linguistique des traces énonciatives*, Kimé.
- Raschini, E. (2008) : « Une acte de dénomination par approximation : l'approche discursive », P. Frath et alii (éds.): *Res per nomen*, Editions et Presses universitaires de Reims, pp.248-261.
- Reboul, A. (1991) : « Comparaisons littérales, comparaisons non littérales et métaphores », *Travaux neuchâtelois de linguistique*, 17, pp.75-96.
- Reboul, A. et J. Moeschler (1998) : *La pragmatique aujourd'hui*, Seuil.
- Sperber, D. et D. Wilson (1989) : *La pertinence : communication et cognition*, Minuit.
- Tamba-Mecz, I. (1981) : *Le sens figuré*, Presses universitaires de France.
- Tamba, I. (1991) : « Un clé pour différencier deux types d'interprétation figurée, métaphorique et métonymique », *Langue française*, 101, pp.26-34.
- Thuillier, Fr. (2004) : « Synonymie et différences : le cas de *paraître* et *sembler* », C. Vaguer et B. Lavieu (éds.): *Le verbe dans tous ses états*, Presses universitaires de Namur, pp.161-178.
- 寺村秀夫 (1984) : 『日本語のシンタクスと意味』 2, くろしお出版.
- 山梨正明 (1988) : 『比喻と理解』 東京大学出版会.
- Vigh, A. (1975) : « Comparaison et similitude », *Le français moderne*, 43, 3, pp.214-233.
- 渡邊淳也 (2003) : 「動詞 *sembler* の機能について」 『玉川大学文学部論叢』 44, pp.93-112.
- 渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』 早美出版社.